

「重度・重複障害」をめぐる国内の研究動向分析 —日本特殊教育学会研究大会（2002-2010）における発表から—

石山 貴章 下山真衣 岡田信吾（教育心理学科）

Analysis of the Trends of Research into “Severe/Multiple Disabilities” in Japan — from the publications in the conferences of Japanese Association of Special Education (2002-2010) —

Takaaki ISHIYAMA, Mae SHIMOYAMA and Shingo OKADA
(Department of Educational Psychology)

抄 録

本稿では、過去10年間における、日本特殊教育学会研究大会の発表から、「重度・重複障害」に焦点をあてて、その研究対象、方法、内容などについての動向を分析、整理した。

その結果、研究発表数の推移については、各年度によって変動に幅があり、研究対象は、幼児・児童が多く、研究方法は、臨床・実践的な研究の割合が半数以上を占めていた。研究内容についても、さまざまな領域からアプローチされていることがわかった。また、研究テーマについては、コミュニケーション、教員の意識調査・専門性向上の割合が高く、次いで、人間関係の形成や身体の動き、心理的安定、健康の保持が挙げられる。一方、発表者の所属については、学校教員の割合が徐々に高くなってきており、現場の課題を個々の事例を縦断的に研究することにより明らかにしようとしているケースが増えている。今回、障害種別にわけて研究動向を検討することにより、それぞれの障害に特有なデータを把握することができた。今後は、他の学会発表についても詳細に検討していくとともに、これまでの研究の流れと動向を整理しながら、研究現場に還元できるデータを蓄積していきたいと考えている。

キーワード：研究動向 重度・重複障害 特別支援教育 日本特殊教育学会